

2022年05月17日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【一服感】

どちらを向いても、「一服感」が出ている。

まず、ロシア・ウクライナ情勢を見ても、長期化する様子がうかがえる。

ウクライナが反転攻勢に出ていることが報道されているが、プーチン露大統領の言動から判断すると、停戦に向かうことはなさそうだ。

ウクライナの反転攻勢は、米国や欧州からの軍事支援が有効であることを示している、と
思料する。

ウクライナへの軍事支援では、米国からの情報提供も大いに役立っている様子だ。

しかしながら、ロシアとウクライナの双方に、停戦に向かう姿勢は見えない。

結局、先が見えないので、戦闘はまだまだ続く、としか言えない。

また、フィンランドとスウェーデンがNATOに加盟申請することが決まった。

両国の加盟が認められるには、トルコが否定的なので、まだ紆余曲折があろうが、ロシア
にしてみれば、「やぶへび」となった。

これも、ロシア情勢に関して、長期化とみて良いのだろう。

++++
++++

米国の金融政策に関しても、「一服感」が出ている。

今年(2022年)3月のFOMCで、米国は利上げを開始した。

この時(3月のFOMC)の利上げは0.25%であった。

そして、今月(2022年5月3日、4日)のFOMCで、0.50%の利上げを決めた。

この今月の利上げで、FF金利(フェドファンド金利、米政策金利)の誘導目標レンジは、
「0.75-1.00%」となった。

そして、FRBの保有する資産縮小を6月に開始する、と発表した。

さらに、パウエル議長は、次の2会合(=2回のFOMC)で、それぞれ0.50%の利上げを示唆した。

一方で、0.75%の利上げには、積極的ではない、と発言した。

+++++

つまり、6月のFOMCで、0.50%の利上げとなり、さらに、7月のFOMCで、0.50%利上げされることが明瞭となった。

7月のFOMCの時点で、FF金利(フェドファンド金利)の誘導目標レンジは、「1.75-2.00%」となる。

+++++

米国の金融政策が明瞭となったことで、マーケット(外国為替市場)では、投機的な(=思惑の強い)動きが抑制された、と史料する。

別な言い方をすれば、米国が強い利上げ姿勢を示すならば、「0.75%もしくはそれ以上の利上げ幅になるのではないか?」といったウワサをばらまきながら、米ドルを買い上げる手法に、ストップがかかった。

6月のFOMCも7月のFOMCも、利上げ幅はそれぞれ0.50%と明瞭なのだから、上述のようなウワサには、誰も乗らない、ということだ。

+++++
+++++

当面のところは、この「一服感」も良いのだろう。

しかしながら、ロシア・ウクライナ情勢が長期化するならば、その時点で、新たな問題点が噴出するであろう。

また、米国の金融政策にしても、6月のFOMCと7月のFOMCが明瞭となっても、年内(2022年内)には、9月、11月、12月と、3回のFOMCが残っている。

それぞれのFOMCで、0.50%の利上げを実施するならば、さらに、1.50%の利上げが控えていることになる。

つまり、先に行けば、この「一服感」を乗り越えて、新たなテーマ（材料）が待ち構えている、ということだ。

++++
++++

金融政策に関しては、米国に限らず、日本（BOJ＝日銀）の金融政策はもちろん、欧州（ECB）の金融政策、英国（BOE）の金融政策、豪州（RBA）の金融政策、などなど、それぞれの金融政策を考慮する必要がある。

考えるべきことはたくさんあるのだから、いつまでも、この「一服感」が続くわけではない、と思料する。

++++
++++

(2022年05月17日東京時間13:05記述)